

Michael S. Billig,

Barons, Brokers, and Buyers: The Institutions and Cultures of Philippine Sugar.

Honolulu: University of Hawai'i Press, 2003,
xiv + 320pp.

なが の よし こ
永野 善子

フィリピンの砂糖産業は1980年代半ばの国際市場における砂糖価格の暴落を契機として、輸出産業の地位を喪失した。以来、タイが東南アジアにおける最大の砂糖輸出国となり、今日では、タイの砂糖は近隣アジア諸国に輸出され、フィリピンの砂糖はごく少量のアメリカ向け輸出割当を除くとすべて国内市場向けとなっている。19世紀後半以降、フィリピンの代表的輸出産業として君臨してきた砂糖産業は、20世紀前半のアメリカ植民地期にアメリカをほぼ専一的な輸出市場とするようになり、アメリカ市場依存型の生産構造を形成するにいたった。第2次世界大戦後独立したのちも、フィリピンは特惠的関税措置とアメリカ向け輸出割当制のもとで対米依存型の砂糖輸出構造をほぼそのまま維持することになった。このような構造に大きな変化が現れたのは、特惠的関税措置が失効し輸出割当制が廃止された1974年以降のことである。したがって、半世紀以上にわたり対米輸出を前提として構築されてきたフィリピン砂糖産業が抱える構造的問題は、すでに1970年代半ばから露呈し始めていたのである。

こうした状況を踏まえて、当時フィリピン研究の分野で隆盛をきわめていた社会経済史研究の分野から、フィリピン砂糖産業の歴史的構造の解明に関わる研究が生み出されるようになった。その代表的な著作としては、アルフレッド・W・マッコイの西ビ

サヤ地域の社会史研究 [McCoy 1977], 評者のアメリカ植民地期を中心としたフィリピン砂糖産業史研究 [永野 1986], ジョン・A・ラーキンによるネグロス島とパンパンガ州の砂糖生産地域の比較史研究 [Larkin 1993]^{〔注1〕}, フィロメノ・V・アギラール・ジュニアによるネグロス島の社会文化史研究 [Aguilar 1998]^{〔注2〕}などが挙げられよう。これらの著作の共通点は、いずれもフィリピン砂糖産業の全盛期である19世紀後半から20世紀前半をその考察の中心の対象時期として設定していることにある。

これに対して、本書『バロン、ブローカー、買付け人 フィリピン砂糖の制度と文化 』は、フィリピンの砂糖産業が衰退の一途をたどった1990年代をその考察の対象としたものである。経済人類学者の立場から400人以上に及ぶ砂糖産業関係者とのインタビューを駆使しながら参与観察を行い、ネグロス島やルソン島の砂糖産業の衰退がもたらす社会構造上の変容を、一方で構造的に把握するとともに、他方では、その構造変化を分析するツールとして、具体的事例を網羅的ではなく選択的に叙述するという手法をとっている。

その主な主張を要約すると、次のようになる。すなわち、中部ルソン地方やネグロス島など、植民地期以来のフィリピンの砂糖生産地帯では、「砂糖バロン」と呼ばれる、富裕な砂糖農園主 (hacendero) が豪勢な生活様式をもち、「疑似封建的な」農園経営に従事してきた。しかし、砂糖産業が衰退するなかで、「砂糖バロン」たちは依然として社会に対する権力と影響力を行使しているもの、実際には、それは、もはや過ぎ去った栄光の日々の痕跡にしかならない。砂糖産業が衰退するなかで、同産業を支配するエリート層 (農園経営者、製糖工場経営者、砂糖取引業者や商人、政治家) の構成が変化し、とりわけ、華人系企業家 = 砂糖取引業者の製糖業への参入が目立つようになった。このように変化途上の砂糖生産地帯をフィリピン社会全体のなかに投入して理解すると、概して、農村の農業エリート層のフィリピン社会における地位の低下がその政治的、経済的、文化的傾向として指摘される一方、都市の工業、商業、金融の各セク

ターにおけるエリート層の台頭がめざましい点が指摘できる。このように本書は、衰退途上の砂糖産業におけるエリート層の政治的、経済的、文化的志向を、変貌する国際社会のなかで揺れ動くフィリピン社会に投入して、その意味内容の動態的解読を試みた好著である。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 植民地主義遺制と新植民地主義
- 第3章 生産、融資、CARP（包括的農地改革計画）、アメリカの輸出割当制
- 第4章 砂糖取得権、倉荷証券（quedan）、砂糖統制庁（SRA）
- 第5章 砂糖輸入大戦争
- 第6章 合理化、グループ主義、華人
- 第7章 結論 フィリピン砂糖の制度と文化

第1章では、本書の目的と分析視角が示されている。本書は、変化途上のフィリピン政治経済の分析を行うことに主眼がおかれている。フィリピンの政治経済生活は、これまで輸出向け農業に従事する農村に基盤をおいたエリート層によって支配されてきたが、今日、マニラに基盤をおく、工業、商業、金融諸分野がますます影響力を強化しつつある。砂糖産業についてみると、かつて最も強力であった砂糖キビ作プランターの利害を犠牲にして、砂糖取引業者や商人、そして砂糖を原料として使用する清涼飲料水製造業者や輸出向け食品加工業者の権力と影響力が顕著に増大している。近年の多くの研究では、古くから続く農村の寡頭的支配層が今日においても依然として存在し、フィリピンのエリート層は、国家との結びつきにおいて、多かれ少なかれ同様の性向を示すことが指摘されている。実際、フィリピンの地主権力のこの変化なき性格についてのイメージは、フィリピンに関する一般的記述における規範ともなっている。著者は、こうした考え方を全面否定するわけではないが、今日のフィリピンの現実とは、

こうしたイメージよりはるかに複雑な様相を呈していると考えている。農村のエリート層は、従来とは決定的に異なった状況のなかで、その地位と権力を保持するために、新しい同盟関係を結んだり、新しい戦略を展開するために富と影響力を行使しているからである。こうした新たな状況を、単に事実の羅列ではなく、政治、経済、社会、文化の諸側面にわたる、砂糖産業の制度的分析論として提示することが、本書のねらいである。

第2章では、スペイン植民地期からアメリカ植民地期を経て独立後1980年代にいたるまでのフィリピン砂糖産業略史が手際よくまとめられている。上述のように、すでにフィリピン砂糖産業史に関しては主要な研究がいくつか発表されているので、ここでその略史を繰り返す必要はないであろう。簡単に著者の議論の進め方を述べると、植民地期におけるネグロス島とパンパンガ州の主要砂糖地帯の砂糖産業の発展過程、とりわけ農園経営の展開についての比較考察を行い、次いでアメリカ植民地期から現代までのフィリピンの砂糖産業の展開が述べられる。そして、最後に、1980年代半ばの国際市場における砂糖価格の暴落を契機とするフィリピン砂糖産業の衰退と変容が位置づけられている。

第3章から第6章は、本書の議論の核心を成す部分であり、1990年代におけるフィリピン砂糖産業の制度的変化や旧来の権力構造の溶解過程を見事に照射している。

まず第3章では、生産、融資、CARP（包括的農地改革計画）、アメリカの輸出割当制の4つの側面から、砂糖産業をめぐる状況の変貌に接近している。生産の側面で強調されている点は、フィリピンにおける砂糖の生産性の低さであり、1990年代におけるフィリピン砂糖産業の国際市場からの凋落である。フィリピンは、1970年にキューバに次ぐ世界第2位の砂糖輸出国であったが、91年に第19位へと転落し、99年にはアメリカへの輸出割当を満たすために14万メートルトンの砂糖を輸出したものの、砂糖輸出国としては世界第37位であった。同時に国内消費を満たすために40万メートルトンの砂糖を輸入しており、1990年代にはフィリピンは砂糖の輸出国とい

うよりは輸入国と化していたが、しかし、1982年にアメリカが砂糖の輸出割当制を再度導入したことによって、その割当を満たすために、国内消費用に輸入しながら、アメリカ向け輸出を続けているのである。

なお、砂糖キビ作プランターに対する銀行の融資状況については、1990年代のインフレーションのなかで利子が高騰している点が指摘されている。また、アキノ政権のもとで策定された CARP については、砂糖キビ作地もその対象に含まれているものの、土地の収用は進まず、また地主による自発的土地売却（VOS）の場合にも、農地改革省とのやりとりや土地銀行との交渉においてつまづきをみせる場合が多い点が議論されている。

第4章では、植民地期以来のフィリピン砂糖産業の制度的特徴である分糖法（sharing system）に、議論の主要な焦点が当てられている。分糖法とは、20世紀初頭にフィリピンで製糖業の近代化が図られ、セントラルと呼ばれる製糖工場で砂糖キビの加工が行われるようになったときに、導入された制度である。フィリピンはその他多くの主要砂糖生産国と異なり、製糖工場が砂糖キビ・プランテーションを営んでいるわけではない。ほとんどの製糖工場は、周辺に存在する多数の農園で栽培される砂糖キビの提供を受けて、加工作業を行う。元来、砂糖キビを栽培する農園の多くは、地主による直営農園であったり、あるいは地主が小作農と契約して砂糖キビを栽培するという方法をとっており、こうした状況では、製糖工場は砂糖キビ作地主から砂糖キビの提供を受けないと製糖作業ができないという立場におかれていることになる。

フィリピンの分糖法とは、砂糖キビ作地主が製糖工場に対する原料提供者として強力な立場にあるという生産構造のうえに成立した制度である。それは、砂糖キビ作地主が製糖工場に対して砂糖キビを一定の価格で売却するのではなく、砂糖キビ作地主は（プランターとして）砂糖キビの栽培費として、そして製糖工場は砂糖キビの加工費として、生産された砂糖を一定の比率で、両者間で配分する制度である。この制度が、プランター、すなわち、地主に有利に働くのは、彼らが生産物である砂糖の配分を受

けることによって、彼ら自身が倉荷証券を手にして砂糖を貿易業者や商人に売却する権利をもつことができることにある。しかし、他方、この制度は、製糖工場が生産効率を上げるための資本投資や合理化の意欲をそぐという側面もある。このため、近年、製糖業界に新しく参入した華人系業者は、従来の分糖法にかわって、砂糖キビをプランターから直接買付ける方法の導入を試みたものの、プランターからの強い抵抗にあってその試みはあえなく挫折した。著者は、この挫折の文化的意味を、華人系業者の砂糖産業への参入に対するフィリピン系地主の抵抗として位置づけている。

第5章は、1990年代のフィリピン政府の砂糖輸入自由化政策に対する、砂糖権益の抵抗を取り上げている。フィリピンの砂糖価格は国際的水準からみて高く設定されており、ラモス政権下の経済自由化の動きのなかで、1992年に砂糖輸入自由化の本格的議論が開始された。もちろん砂糖業界は、こぞってこれに反対した。上院で輸入自由化反対の論陣をはったのは、グローリア・マカパガル＝アロヨ（現大統領）であった。輸入自由化賛成は、国内で大量の砂糖を消費する食品加工業者であった。1993年半ばになると、下院に砂糖の輸入を非合法とする「輸入合理化」法案が提出され、のちに上院でも「砂糖輸入合理化」法案が提出されたが採決にはいたらなかった。行政官庁が、こうした「保護主義的性格」をもつ法案にラモス大統領が賛意を示すことはない、と判断したためである。ラモス大統領が行ったことは、1994年初頭での行政命令による砂糖を含めた輸入品に対する関税削減措置（最高65%）であった。さらに、フィリピンは、WTO加盟国として、関税率50%で毎年最低限4万8000トンの砂糖を輸入する義務を負った。かくして、フィリピンは貿易自由化の流れに屈し、砂糖業界の執拗な抵抗は挫折するにいったたのである。

第6章は、1990年代のフィリピン砂糖産業の変貌過程を、農園経営の合理化をめぐる問題、砂糖業界のグループ化、そして製糖業への華人系業者の参入を軸に検討したものである。フィリピンの砂糖産業の低い生産性を解決する方法として、かねてから農

農園経営の合理化が重要な課題とされてきた。農園経営の合理化は、すなわち、農園労働者の処遇をめぐる問題とただちに結びつく。フィリピンの、とりわけネグロス島の農園経営は、広く知られるように、多くの場合、地主直営によるもので、地主と農園労働者との間には、一般的な労使関係というよりは、温情主義的關係やパトロン＝クライアント関係が存在してきた。1980年代半ばの砂糖産業の危機以後、砂糖キビ農園でこうした温情主義的關係を維持することはきわめて困難となっており、新しい農園経営のあり方がさまざまなかたちで模索されている。しかし、この問題に対して、政府諸機関、農園経営者、労働組合など、いずれも妥当な解答をいまだ見出していない。

こうした産業自体の弱体化のなかで、既得権益にしがみつこうという動きも加速する。砂糖キビ作プランター、製糖業者、そして大手貿易業者それぞれの間で形成されるさまざまな派閥やグループ間の対抗関係である。こうした対抗関係は、産業の活性化に役立つというより、むしろ事態をより混迷化させている。このようにみえてくると、1990年代のフィリピン砂糖産業にはなんら目立った構造変化が生じていないとの印象を受けるかもしれない。だが、輸出産業から国内産業へと砂糖産業が変貌するなかで、確実に起きた変化がある。それは製糖業界への華人系貿易取引業者の参入である。多くの製糖工場が華人系業者によって買収されたことは、砂糖業界におけるプランター勢力の弱体化を加速させた。とくに1980年代半ばの砂糖産業の危機以降、多数の砂糖キビ作地主が経営破綻に追い込まれるなかで、華人系業者が勢力拡大を図ったのである。

第7章は、結論部分にあたり、そこで著者は次のように語っている。すなわち、アラネタ家、ロペス家、エリサルデ家　これらは砂糖産業を背景としてフィリピンで最も富裕な一族として財をなした人々である　とは対照的に、今日の砂糖産業では、シヤ家、ゴコンウェイ家、チャン家などが製糖業界の新興華人系勢力として、きわめて有力な地位を維持している。このような新旧エリート層の交代劇は、フィリピン社会全体でみられる現象である。しかし、

このことは、ひとつの文化がもうひとつの新しい文化に代替するといった劇的变化を意味するものではない。別言すれば、農業エリート層の没落は、ただちに地代追求的、新重商主義的、かつ家産的な国家の終焉をもたらすものではなく、実際に生起している変化はより複雑かつ漸次的傾向をもつものである。したがって、究極的結末は、いまだ予測不可能である。しかし、今日の国際的および国内的資本主義経済の展開における制度的マトリックスは確実に劇的に変化しつつある、と著者は主張するのである。

以上のように本書の議論の大筋をまとめてみると、その意義と特徴がおのずと明らかとなろう。冒頭で述べたように、本書は、従来のフィリピン砂糖産業に関する主な研究業績と異なり、1990年代のフィリピン砂糖産業の衰退期におけるその変化の特徴を析出したものである。従来の研究では、輸出産業としてのフィリピン砂糖産業の役割は1980年代半ばに終焉したのであり、それ故、現時点でフィリピン砂糖産業を研究対象とすると、歴史研究に特化するか、さもなければ、1980年代半ば以降、砂糖産業の危機によって深刻な打撃を受けた砂糖キビ労働者を取り巻く社会経済状況に関する実態を調査するという、2つの流れに分極化していったきらいがある。とりわけ後者の場合、現地におけるNGOの活動からの要請に応えるといった性格をもつことも多かった。本書は、1990年代におけるフィリピン砂糖産業をめぐる研究潮流のなかで、あくまで砂糖産業の構造変化、とりわけ、プランターや製糖業界、そして砂糖取引業者などのエリート層の動きを克明に追うことによって、衰退過程の砂糖産業のなかで生起するエリート層の権力構造の変貌を描写し分析することに成功した著作である。さらに、それを砂糖産業のみにとどまらず、フィリピン社会全体のエリート層の動態変化のなかに位置づけたところに本書の意義を見出すことができよう。

フィリピン研究では、1970年代以来、米作農村の社会構造の変容についてすぐれた研究が多く生まれ

た。1972年にマルコス大統領のもとで農地改革が打ち出されて以来、かねてからフィリピン米作農村社会の特徴とされてきた大地主制がどのように変化していくのか、それが社会に与える影響とは何かが問われたのである。農地改革政策は当初意図されたようなかたちでは実施されなかったものの、同政策の導入がフィリピン農村社会に与えた影響はきわめて大きかった。ルソン島の米作農村社会を対象にしたいくつかの調査が指摘しているように、かつての地主中心の農村社会から、地主勢力が減退していき、かわって商業エリートと呼ばれるような商人層が勢力を増す一方、農村の底辺をかたちづくっていた小作農層と土地なし層の間の階層格差拡大が指摘されてきたからである〔Kerkvliet 1990；梅原 1992〕。このたび、本書で明らかにされた砂糖産業をめぐるエリート層の構成変化は、従来のルソン島の米作農村の研究で明らかにされてきた変容過程とあわせて、1970年代以降、大きな社会変動のなかに包み込まれてきた現代フィリピン社会のあり方を理解するうえで、重要な要素となるであろう。

なお、最後に問題点をひとつだけ挙げておきたい。本書の主要な議論の柱として取り上げられた要因のひとつに分糖法がある。本書では、分糖法は、砂糖産業の合理化の阻害要因として位置づけられている。たしかに著者が指摘するように、フィリピンのように地主であるプランターの権力が強く働いてきた地域では、この制度は製糖工場の経営効率の改善のための資本投資意欲をそぐことになり、同時に、地主による農園の経営合理化への道を回避する要因として作用してきた。しかし、異なる土地制度のもとでは、分糖法は経営効率の阻害要因ではなく、むしろ促進要因として作用することが近年のタイの砂糖産業史研究で明らかにされている〔山本 1998〕^(注3)。それによると、タイの砂糖産業の担い手は、大地主ではなく、むしろ中小規模の農民であり、従来は、ともすれば砂糖キビ価格の決定をめぐる製糖工場と砂糖キビ農民が対立しがちであった。しかし、政府決定の全国一律価格のもとで新たに分糖法が導入されたことによって、製糖工場と砂糖キビ栽培者の双方が生産性向上をめざして協調する体制（利益共

同体）が生み出され、タイでは砂糖産業の国際競争力が高まったのである。1980年代半ばにフィリピンの砂糖が国際市場から撤退するのと反比例するかのよう、タイが世界有数の砂糖輸出国としての地位を確立した背景のひとつとして、分糖法の機能の仕方の相違によって両国間の生産性に大きな格差が生じたことをわれわれは認識すべきであろう。

（注1）書評として永野（1994）を参照。

（注2）書評として永野（2000）を参照。

（注3）書評として永野（1999）を参照。

文献リスト

日本語文献

- 梅原弘光 1992.『フィリピンの農村 その構造と変動』古今書院。
 永野善子 1986.『フィリピン経済史研究 糖業資本と地主制』勁草書房。
 1994.「J・A・ラーキン著『砂糖と現代フィリピン社会の起源』」『アジア経済』35(8)(8月): 83-87。
 1999.「山本博史著『タイ糖業史 輸出大国への軌跡』」『神奈川大学評論』34(11月): 158-159。
 2000.「Filomeno V. Aguilar, Jr., *Clash of Spirits: The History of Power and Sugar Planter Hegemony on a Visayan Island*」『アジア経済』41(5)(5月): 103-107。
 山本博史 1998.『タイ糖業史 輸出大国への軌跡』御茶の水書房。

英語文献

- Aguilar, Filomeno V., Jr. 1998. *Clash of Spirits: The History of Power and Sugar Planter Hegemony on a Visayan Island*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
 Kerkvliet, Benedict J.T. 1990. *Everyday Politics in the Philippines: Class and Status Relations in a Central Luzon Village*. Berkeley: University of California Press.
 Larkin, John A. 1993. *Sugar and the Origins of Modern Philippine Society*. Berkeley: University of California Press.
 McCoy, Alfred W. 1977. "Yilo-ilo Factional Conflict in a Colonial Economy, Iloilo Province, Philippines, 1937-1955." Ph.D. dissertation, Yale University.

（神奈川大学外国語学部教授）